

観音菩薩の宗教 ②

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

大乘仏教圏全域で信仰された菩薩

今回は『般若心経』において観音菩薩がブツダに替わって空の哲学を説くことから、思想の上で観音菩薩が大乘仏教を代表する菩薩と見做し得ることを述べた。今回は観音菩薩が大乘仏教圏全域で最も人気を博した菩薩であることを見てみたい。

日本において人気のある菩薩というと、地藏菩薩と観音菩薩の二尊が挙げられよう。そのことは、『今昔物語』によく現れている。『今昔物語』は仏教説話を主とした物語集で、仏菩薩や天狗や鬼などの霊験譚、因縁譚を数多く収録するが、他を圧して多いのは観音と地藏の霊験譚である。『今昔物語』第十六巻の

全編四十話が観音菩薩の第十七巻の全五十話のおよそ六割が地藏菩薩の霊験あらたかな物語を伝えている。このことをもって両菩薩が平安期の日本で深く尊崇されたことがわかるが、仏教圏全体から見ると両者には大きな違いがある。すなわち、観音菩薩は仏教文化圏ことに大乘仏教圏全域で広く尊崇されて来たが、地藏菩薩は漢文仏教圏に限って、別して日本で高い人気を博した菩薩といふことである。このことは、第一に両菩薩に関して述べる、經典の文献学的な相違に、第二に両菩薩の図像表現の地理上の分布の差違に見ることが出来る。まず、両菩薩の差を経

典から見てみよう。中国や日本の地藏信仰の大きな根拠となった『地藏十輪経』『地藏菩薩本願功德経』『地藏菩薩発心縁十王経』などの經典はすべて漢文で伝わっており、サンスクリット語の經典は未発見で、チベット語訳もない。このことはこれらの經典がインド成立ではなく、中国や日本で作られた可能性を示唆している。これよりわかるのは、地藏菩薩がインドに起源を有するにせよ、その後の漢文仏教圏でさらなる展開をしたというのである。一方、観音菩薩に関しては、漢文のみならずサンスクリット語で説かれた重要經典が複数伝存する。なかでも重要なのは全編に亘って観音菩薩の功徳を説く『観音経』である。漢訳の『観音経』は独立經典として広く説誦されて来ただけでなく、『法華経』の第二十五章「観世音菩薩普門品」に組み込まれて流布してき

た。この經典には、原典に相当する梵本が伝存し、インド大乘仏教で篤い観音信仰のあったことが証明される。また、『華嚴経』の「入法界品」には観音菩薩の住所がポータラカ山（補陀洛山）と述べられており、『無量壽経』には阿彌陀如来が法蔵菩薩であつた時代に観音菩薩が仕えたことと目される記述がある。両経には漢訳とともにサンスクリット本があり、インドにおける観音信仰を確認することができる。このほか、『大乘莊嚴宝王経』は日本ではあまり馴染みがないが、そのサンスクリット語原典の『カーラナー・ヴィユーハ・マハーヤーナ・ストラ・ラージャ』、インドをはいじめ、チベット・モンゴル・ネパール・カンボジアなどで観音信仰の根拠として重視された（佐久間留理子「インド密教の観自在研究」山喜房佛書林）。この經典の説く観音菩薩を讃える真言「オン・マニ・パ

ドメー・フーム」は、それぞれの土地独特の訛りを有しながらも、知らぬ人がいないほど人口に膾炙した。例えばモンゴルでは、一九三〇年代に共産党政府から致命的ともいえる仏教弾圧があつたにも拘わらず、一九九二年の民主化後は再び「オン・マニ・パド・マフン」が広く復活している（金岡秀郎「五体投地の源流と展開」亜細亜大学杏壇会『鐘』所収論文）。次に地藏菩薩と観音菩薩の図像表現・造像に関する地域性を見てみよう。地藏菩薩は特に日本で固有の信仰を展開し、全土に石地藏像が造られて民間に浸透したが、仏教の故地たるインドでは単独での造像が見られない。チベットやモンゴルでも独立した地藏菩薩の造立はなく、信仰の広まりの跡をたどることができない。これに対し、観音菩薩はインドやカンボジアなどをはじめとする仏教弘通地域、ことに大乘仏

教圏すべてで広く深く崇拜され、図像表現も活発になされてきた。

各地の仏像の調査・研究で名高い仏教美術史家の宮地昭教授によると、インドで最初に観音像が作られたのはクシャーン朝時代（二世紀中頃～三世紀中頃）のガンダーラと推定される。ガンダーラの観音像には、釈迦三尊像の両脇侍として弥勒菩薩とともに造像されるほか、単独では半跏思惟像の作例が多い。半跏思惟像といえは、日本では中宮寺の弥勒菩薩半跏思惟像が著名であるが、ガンダーラの観音菩薩半

跏思惟像は藤座に半跏で腰かけ、左手に蓮華を執り、右手で思惟のポーズの形をとっている。五世紀後半から七世紀頃には、アジャンター、エローラなど西インド各地で『法華経』「観世音菩薩普門品」にもとづいて造られた十六の観音像が知られている。七世紀から十二世紀には、東インドのビハール・ベンガル地方に栄えたパーラ朝や同時期のオリッサにおけるパウマラカ朝で密教美術が隆盛し、観音像はそれぞれ二百例、八十例と最も多く作られている。それらは伝統的な二

臂像のほか、四臂・六臂・八臂・十二臂の観音像が確認されている（宮地昭『増補版仏像学入門』春秋社。ただしインド以外の地で多く造られた千手千眼観音は、インドにおいては未発見である。以上、地藏菩薩と観音菩薩の仏教圏における相違を見てきた。紙幅の都合でここでは詳しく述べられないが、地藏信仰がほとんど見られないチベットやモンゴルでも、観音像は数多く造形化されてきた。例えばモンゴルの首都ウランバートルにあるガンラン寺の観音像は一九一一年に建立された高さ二六・五メートルの巨軀で、三八年にソ連に持ち去られ機関銃の弾丸となったが、民主化後の九六年に再建された。現在は個人の信心のみならず国家独立のシンボルとして上述の真言とともに人々に愛されている。これもまた観音菩薩が大乘仏教圏に広く受容された例証である。



モンゴル国ガンラン寺の「開眼観音像」。八世活仏の眼病平癒を祈願して建立された。写真は九十六年再建のもの（筆者撮影）

高尾山の昆虫

オオトラカミキリ

日本には種類近いカミキリムシが生息しているとされ、その種類数や多様化には改めて驚かされます。

その中でオオトラカミキリは、その稀少性やその名に相応しい堂々とした体型と雰囲気から、極めて人気の高い種です。

出会う機会には宝くじに当たる確率とされ、高名な学者や著名な採集家であっても、縁がないまま一生を終えるということが当たり前のような状況でした。

晩夏にメスはモミの樹幹に産卵に来ることが知られ、モミが多いことで知られる高尾山では近年発見報告が増えています。

何年か前に自然研究路を歩き、疲れたのでベンチで休んでいると、小さな子供を連れた親子が通りかかると、子供が何かを発見して指さしているのを見れば、「ダメよ！ハチに近づくと刺されちゃうから、離れなさい！」と大声で注意をしている声が聞こえました。

オオトラカミキリはオオスズメバチに擬態していることで知られています。

もしやと思つて近寄ってみると、そこにはオオスズメバチによく似たオオトラのメスが威風堂々と鎮座していました。

